

# キャプテンストライダム 永友聖世に物申す

※これは、キャプスト（何の略かも言うわなくてもわかるよね？）ファンを公言するひとりの編集者（36歳）から永友聖世に送る私信である。



## 拝啓 永友聖世さま

大変ご無沙汰しておりますが、お変わりありませんか？ 前に永友さんに会ったのは…直接話をしたのは昨年の6月にあなたがリリースした4thアルバム『音楽には希望がある』の取材時、そしてその姿をにじにしたのは“LIVE TOUR 2008 明日に向かって踊れ！”のファイナルとなった10/12の恵比寿 LIQUIDROOMだったことを考えると、もうずいぶん会ってないですね。

以前の誌面にも書きましたが、4thアルバム『音楽には希望がある』は素晴らしいキャプストらしい作品だったと今でも思います。1stアルバム『ブッコロリー』（03年11月）がマニアックでシュールなおナニアルバムだったとすれば、メジャーに移籍してリリースした2ndアルバム『108DREAMS』（06年2月）は持てる力の全てを注ぎ込んだポップミュージック・アルバムでしたよね。でもその頃、あなたたちはCDとライブのギャップに悩んでいました。その葛藤を自ら解決しようとした答えは、3rdアルバム『BAN BAN BAN』（07年3月）でした。そしてその後、あなたたちは結局、自らの原点である“音楽”が持つ力を信じて4thアルバム『音楽には希望がある』を作り上げました。人間異くで久しぶりにキャプストらしいアルバムになったと嬉しく思いました。そういう経緯を知っている私にとって、あなたたちが作り出した等身大のアルバムは深く胸に突き刺さりました。

で、ここからが本題です。アルバムというひとつの大きなターム毎に様々なテーマを掲げて進んできたあなたたちのことですから、当然のように次はまた新たなカードを切ってくると思っていた。そんな矢先、私の元に1枚のCDが届きました。あなたが5/20にリリースするニューシングル『ブギーナイト・フィーバー』です。オフィシャルサイトでは既に発表になっていましたが、どうやら今年は“キャプテンストライダム・ディスコ・イヤー”と銘打ち、あなたたちは“ディスコ”というテーマに照準を絞ったようですね。ディスコですか。ふむ。

ニューシングル『ブギーナイト・フィーバー』、もちろん聴かせていただきました。永友くんが持つポップセンスと優さを漂わせる歌が印象的なディスコチューン『ブギーナイト・フィーバー』、梅田くん作詞/作曲によるファンキーディスコ（な問題作）『北京原人』、そして電気グルーヴのカバー『Shangri-La』。どれもキャプストらしくて、バラエティに富んでいて、ライブ映える曲ばかりだと思います。

でもこのシングルだけでは、永友くんがなぜ“ディスコ”というキーワードを選んだのか私には理解できませんでした。“ディスコ”がアンマッチだと言っているわけではありません。『音楽には希望がある』には字のごとく“東京ジャズボウディスコ”という曲がありましたし、過去にもディスコチックな楽曲はたくさん作ってきましたよね。“ディスコ”は、キャプストが持つ音楽的要素の重要なひとつなのですから。

でも、『音楽には希望がある』というアルバムは私にとって特別だったのです。あのアルバムは、永友くんが「俺の人生は音楽ですげえ変わったぜ！びっくりだ！音楽やべえ！超やべえ！マンガより全然やべえ！」というとても単純な思考に至った証拠だと私は思っていました。なので当然、今後の流れとしては非常に根元的なモチベーションで音楽を生みだしていくんだと（勝手に）思っていたのです。例えばと適切ではないかもしれませんが、スタンスとしては怒髪天や eastern youth のように、人間性剥き出しな活動を続けていくんだと思っていたし、『音楽には希望がある』はその宣言だったと解釈していました。

なので、私は現時点で永友さんに物申したい。あなたは何を考えた、どういった道を進んでいこうとしているのですか？ おそらく今後発表していく楽曲や、いつの日かリリースするであろう次のアルバムにその答えがあり、それらを全て知ったときに私は納得しているでしょう。でもまだ今は、永友くんが何を考えているのか私にはわからない。09年、永友くんが何を思い、どう考えた、どこへ行こうとしているのか。

というわけで、前置きが大変長くなりましたが、要するに次号でインタビューさせてください。都合の良い日時を言っていただければ合わせます。時間は2時間くらいいいと思います。何卒よろしくお願いたします。

敬具

JUNGLE LIFE 編集部 山中 毅

